

## 「原爆の夜の思い出」

溝西 護（当時 13 歳）

被爆当時、私は広島県立第二中学校二年生であった。真夏の太陽がかんかん照りつける、しかも夏休みというのに毎日のように勤労奉仕と称して、家屋疎開の作業や兵器廠・被服廠の作業にかり出されていた。

八月五日までは、今の百メートル道路にあたる三川町あたりで家屋疎開のため、家に綱をかけて引き倒す作業をしていたが、八月六日は元の東練兵場、今の光町鉄道管理局の東側あたりで、練兵場を耕して芋畑にしてあったその畑の草取りに、同学年六クラス約三百人が参加していた。

西条を汽車で出て八時頃広島駅に着き、歩いて作業現場に着いた。間もなく引率の先生の合図で集合しようとしているとき、鋭い閃光を浴びたのである。私は山陽本線で通学していた級友と三人（一名は死亡）で、上衣を取るためボタンをはずしながら集合場所に向っていると「B29 が三機編隊で東の空からやってくる」と誰かが言ったのを聞いた。空を見上げると、三機が悠然と西に向かっているのが見えた。やがてそれが北へ方向転換をした。そしてその航跡にパラシュートが見えた。その瞬間、真黄色の光がテーンという鋭い響きとともに頭上や周囲を覆った。一瞬茫然として立ちすくんだが、しまった！ やられた！ と思い、あわててから訓練していた通り、両手で両方の目と耳を覆い地面に伏せた。この動作は後で考えるとすべて無意味なものであった。

地面に伏して、やがて押さえていた手の隙間から周辺を見ると、真黄色の情景はやがて灰色に変わって、丁度灰を撒き散らしたような状況になった。覆っていた手を耳・目から離すと、すでに二葉山の麓では何かが爆発して引火したのであろう、火の手が上がっていたのを今でも覚えている。その時友人の一人が「左頬が痛い」と言い出した。見ると左頬の皮膚が剥離して垂れ下がっていた。「頬の皮膚がはげているぞ」と言う「君もはげている」と言った。それから一分～二分と経つ内に、丁度火傷のあとと同じように、ずきんずきんと左の頬と手の甲、胸の一部が痛みはじめた。

同級生約三百人は、被爆のショックで我を忘れ周辺に散っていった。私たち三人も、一步でも自宅（西条）に近い方向に避難しようとして広島駅に近づいたが、なにせ痛みが激しく、居ても立ってもおれなかった。そこで駅裏の国鉄構内にあった水道栓（水はやがて出なくなった）を開けて、よごれたタオルに水を一杯浸み込ませて、火傷部分にあてて冷やした。しかし、その瞬間は痛みはとれても、すぐにまたずきんずきんと痛み出した。何度タオルを替えてやっても同じであった。仕方なく痛いのをこらえて、広島駅から線路づたいに帰ることにした。すると同じように被爆して皮膚の垂れ下がった人、水泡が全身に出ている軍人、切

り傷を負った人の群衆が、線路づたいに東へ東へと避難していた。

向洋駅近くまで帰って。民家の軒先で休ませてもらった。その時その家のおばさんが、青崎の小学校が救急場所になっていると教えてくれた。早速青崎小学校に行くと、応急手当として火傷部分に食用油を塗ってくれた。そうすると痛みはとれた。しかし、そこには大勢の被災者が詰めかけており、その中に、全身を火傷し水泡になって「助けて！」「お母さん！」と悲鳴をあげていた女子学生の姿は、今でも忘れることはできない。

応急手当を受けて、友人三人とまた帰路についた。三人で海田駅で何時くるとも知れない汽車を待つことにした。歩き疲れて三時頃まで駅構内で食事もせず待った。ようやく乗った汽車には、片足を建物の倒壊ではさまれ骨折した人、全身火傷の軍人等、多くの重傷を負った人が通路に横たわっていた。

その時行動を共にした友人の一人は間もなく死亡し、他の一人とは昭和三十八年まで会うことはなかった。十八年目、偶然K高校に転任して行った時、その友人もその先生をしているのに出会い、当時の思い出を語ったのである。しかもその学校の校庭の一隅に、被爆して広島から歩いて帰る途中、民家で休ませてもらった時、広島のを覆っていたきのこ雲を背景に、真紅の花をつけた「さるすべり」（その花を原爆の花という人もいる）の木と同じものが植えてあるのを見て、奇しくも当時を思い出さずにはおれなかった。